

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 24 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K04712

研究課題名（和文）「個性」の成立と言説編成に関する歴史社会学：「個性調査」をめぐるポリティクス

研究課題名（英文）Historical sociology of the formation and discourse organization of individuality: the politics of examining individuality

研究代表者

有本 真紀 (Arimoto, Maki)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：10251597

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治期末以降全国の学校で記録されるようになった「個性調査簿」に注目し、言説レベルでの「個性」と調査の実践において表簿に記録される「個人性」とが結合し、「個性」概念が浸透する過程を析出した。また、「個性」の浸透と「学校的社会化」概念とを関連付け、その交点において重要な意味をもつ「家庭」と「小学1年生」に焦点化して研究を進めた。一次史料の他に教師向けの教育書、保護者向け育児雑誌・書籍についても歴史社会的に分析し、近代学校と家庭がいかにして「子ども」を「児童」にしてきたのか、そこに個性調査や家庭調査がどう関与したのかを明らかにし、現代的な教育問題との接点についても示唆が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の近代学校において「個性」言説と「個性調査」実践が浸透していく過程を、「学校的社会化」の観点から考察する独自性の高い研究である。明治期から昭和戦前期にかけての「個性調査簿」、学籍簿、学校日誌等の学校文書を全国規模で収集するとともに、同時期の教育・育児関係雑誌および書籍も併せて分析することで、家庭と学校との連絡、小学1年生への対応の変容過程を明らかにした。また、小学1年生学級のフィールドワークを継続し、歴史的経緯をもとに現代の子育てや入学時の学校適応を考察する視点を提示した。加えて、「児童虐待」「教育と罰」「劣等児」などの切り口から、「個性」が見出されてきた経緯についての成果を公表した。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the “assessment chart of individuality” which has been recorded in schools since the Meiji era, and analyzes the spread of the concept of “individuality” through the interconnection of “individuality” in discourse and “individuality” as recorded in the chart. This study also links the spread of “individuality” to the concept of “school socialization,” and focuses on “family” and “first graders” which have important meanings at the intersection of these two concepts. In addition to primary historical documents, pedagogical books for teachers and childcare magazines and books for parents were also analyzed from a historical sociological perspective. Accordingly, we were able to clarify how modern schools and families have made “children” into “pupils” and how individuality examinations and family surveys are involved in this process. In addition, suggestions are made regarding the points of contact with contemporary issues.

研究分野：教育社会学

キーワード：個性 個性調査 言説編成 歴史社会学 学校的社会化 小学1年生 家庭 児童

1. 研究開始当初の背景

「個性」は、今日の教育論および教育政策に不可欠なキーワードであり、「個性尊重」はスローガンのように内実を顧慮されないまま使用される傾向もある。こうした「個性」に関する教育言説はどのような経緯をたどって編成されてきたのか、という問題関心が本研究の出発点であった。また、明治後期以降、学校は児童の「個性」の源泉として家庭教育を問題にし、「家庭調査」を実施していたことから、家庭と学校との関係も重視する必要があると思われた。

言説編成を研究する上で土台となるのは、M.フーコー(1975=1977)が提起した近代における人間管理の技術としての個人性把握の分析である。加えて、J.ドズロ(1977=1991)は裁判所・博愛団体・精神分析医などの保護複合体が家族の秩序維持の装置となり、家族の前面に《社会的なもの》が現れる歴史を分析した。就中、フランスの家族の変質途上において家庭の中の個人が観察対象として構成されていく様相から示唆を受け、本研究を構想した。

日本における教育言説としての「個性」概念と、学校が行ってきた「個性調査」「家庭調査」、さらには「家庭との連絡」実践を重層的に扱う先行研究はほとんど存在しなかったが、研究代表者と協力者は本研究の開始までに全国的な学校史料調査を蓄積し、「個性調査簿」と関連表簿を画像データとして5万点余り収集して分析に着手していた。こうした一次史料の収集・分析を通して、「個性調査簿」の成立過程、「家庭調査」を介して家庭が学校化していく経緯、児童の観察結果を書き留める表簿の項目・様式に規定される個人性理解の在り方などを明らかにしてきた。

本研究は、それらの成果をさらに前に進め、「個性」および「個性調査」を「子ども」が「児童」へと仕立て上げられていく言説と実践の文脈に置いて、その歴史を学校の枠内に限局せず、家庭と社会へも視野を広げて探究することを目指した。

2. 研究の目的

前述の背景を踏まえ、以下2点の解明を目的として設定した。

(1) 近代日本の小学校における「個性」言説および「個性調査」の浸透過程

心理学的知識の一つとして翻訳・紹介された「個性」が児童を対象とする調査の実践と結びつき、当然のものとして小学校で実施されるに至る過程を明らかにする。明治中期の人物査定・操行査定に端を発する個人性把握から、訓練の方法、人員配分の技術としての「個性調査」への移行、さらには就学前児童へも調査対象を広げて実践されていく様相を読み解く。その過程で、「個性」は教育関係者らによってどのような概念として提示されたのか、「個性」が調査・表簿と出会い、書記行為として実践されることで、いかなる要素の束として認識されたのかを解きほぐすことを目的とする。これは、錯綜する個性論議に新たな視点を提示することにもつながる課題と考えられる。

(2) 「学校的社会化」の歴史における「個性調査」の運用

「学校的社会化」(北澤毅 2011)は、子どもが学校という特殊な社会において求められる独特のふるまい方や思考パターンを獲得していく過程であるが、児童の「個性」はこの「学校的社会化」に向けた働きかけの中で観察される。学級学年制の確立、義務教育6年制の施行、尋常小学校卒業の一般化に伴って、「個性調査」は入学後速やかに行うことが奨励され、学校は家庭を「個性」の原因と捉えて家庭調査に力を入れるようになる。ここから、「個性調査」を学校内に限定された実践と捉えるのではなく、家庭を含めた形で考察することが必須と考えられる。

そこで、「家庭ト気脈ヲ通スルノ方法」(1891年「小学校教則大綱ノ件説明」)を端緒として変容してきた家庭と学校の関係史、とりわけ就学させることをめぐる家庭教育の変化を「個性」把握の視点から捉え直すことを、本研究のもう一つの目的として設定した。

3. 研究の方法

本研究の特色は、公開された「個性」言説のみならず、小学校の調査実践のなかで記述された「個性」を比較検討し、「個性」と社会諸制度との結びつきをはじめとする言説編成の諸相、「個性」概念の成立と普及、それに伴って生じた家庭教育の変容を多角的に明らかにすることにある。

そこで注目されるのが、教師によって記入された実際の「個性調査簿」一次史料である。この表簿には、成績、出席、身体、生育歴、十数項目にも細分化された性質や行動、家族構成や生活程度、近隣の状況、家庭での様子、学校に対する父母の希望などに至るまでが詳細に記されている。それぞれの表簿の様式や項目、保護者への調査結果を含めて手書きされた文字列は、個人が「個性」の語の下にどう記述されていたのかを示しており、非常に貴重である。「個性調査簿」に加えて学籍簿や児童訓練簿、品行簿などの関連表簿まで含め、すでに収集済みの一次史料画像の分析と、補充の史料調査を行った。これらを基に調査の実践における「個性」の運用を読み取り、教師や保護者にとっての「個性」がいかなるものであったのかを析出するためのデータベース作成を進めた。

一方、一次史料調査と並行して、教師向けの教育雑誌・教育書、保護者向けの育児雑誌・教育書、幼児から低学年児童向け雑誌の収集、分析を進めた。これら資料を経時的に見通すことで、小学 1 年生児童に対する調査が重視されるようになる経緯を明らかにし、学校が新入学児童とその家族に向けるまなざしと働きかけ、学校と家庭とが最初に取り結ぶ関係の変化を考察した。

こうした史資料から読み解いた歴史的経緯と現代の学校教育との連続/非連続を検討するために、複数の公立および私立小学校において小学校 1 年生学級での継続的なフィールドワークを行った。また、このフィールドワークで学級を観察させていただいた学級の担任教員には、日常的な個性把握とそれに基づく実践についての聞き取り調査を実施した。

本研究に関心を寄せるワシントン州立大学歴史学部準教授で日本文化史が専門の **William Puck Brecher** 氏を立教大学招へい研究員に迎え、「日本における『個性』の成立と展開」をテーマとする研究会を開催、参加者を交えて討論を行ったことも、研究の視点を相対化する上で有効であった。

4. 研究成果

本研究の成果は、以下 3 項目に分けられる。

(1) 「個性」言説および「個性調査簿」にもとづく研究

すでに収集済みであった史資料を整理し、リスト化、データベース化を進めた。そのうち、茨城県、愛媛県、山形県で収集した「個性調査簿」「人別表」をデータセットとして入力し、分析した。表簿から、保護者職業および学業成績と生活歴設計との関連性、児童の行動・性向・悪癖等の記述にみる教師の児童観、観念と調査実践の位相の相違などに関する知見を提示することができた。ワシントン州立大学歴史学部準教授 **W. P. Brecher** 氏と共に開催した「日本における『個性』の成立と展開」をテーマとする研究会では研究協力者を含む 5 名が発表した。また、複数の学会において一次史料をもとにした研究発表を行った。

一方、「個性調査」の全国的な広がり、時期や地域による異同を検討するために、未着手であった地域を選び、学校表簿一次史料の調査と収集を行った。また、教育雑誌・教育書等の収集と分析も行った。これらの史資料から、当初は心理学・教育学をリードする者たちの言説であった「個性」概念が学校に浸透し、教育活動の一環として個性調査が普及していく中で、**1900** 年代初頭に小学校新入生が「初学年」という特別な取扱を要する新たなカテゴリーとして括られ、**1910** 年前後には入学時の「個性調査」が、その数年後には入学前の調査実施が提唱されたこと、学校は家庭を「個性」の原因と捉えて家庭調査に力を入れるようになったことなどが明らかになった。

本研究は「個性」概念と「個性調査」が浸透する過程の探究であるが、これは学校・教師がそれぞれの児童の「純粋な個性」を見出すようになったということではない。児童の個性は、子どもが学校という特殊な社会において求められる独特のふるまい方や思考パターンを獲得していく「学校的社会化」の中で観察される。そのため、「学校的社会化」の初期段階であり、家庭と学校の接点である小学校 1 年生に焦点を絞った研究の展開可能性が示唆された。

(2) 「小学 1 年生」の歴史社会学研究

はじめて学校生活を経験する小学 1 年生は、学校階梯全体の中でも特別な時期にあり、他の学年とは異なる配慮や扱いを要する存在とみなされる。しかし、随時入学の等級制をとっていた学制期・教育令期に 1 年生は存在せず、新参者の集団が形成されてもいなかった。前項にも述べたが、明治中期以降に 4 月始まりの学年度が採られ、入学時期と入学年齢が揃っていく中で、入学直後の児童に配慮した実践と「個性調査」の早期実施が推奨され、さらには入学前の段階で子どもの個性を把握する必要性が主張されるようになったことが明らかとなった。

そこで、明治期・大正期の教育書および教育雑誌から、入学児童とその家族に向けられるまなざし、学校と家庭とが最初に取り結ぶ関係の変化を考察した。その中で、「個性」が学校生活における人間関係から次第に見えてくるものではなく、指導を効果的に行うための前提として把握しておくべき事項と見なされるようになる変化が認められた。

学校が家庭を「個性」の原因と捉えて家庭調査に力を入れる一方で、大正期の中間層に見られる「教育する家族」を典型として、家庭は次第に学校に適合的な子育てを行うようになり、高度経済成長期の「教育ママ」を経て、育児は学校への「予期的社会化」の様相を色濃く帯びるようになる。こうした関係史について、近代学校開始前後の時期から現代までを射程に入れ、通史的な視点から学校と家庭の関係の変遷を捉えた。

また、学校において新規参入者がいかに処遇されてきたか、「学校的社会化の歴史」の視点から分析を進めた。制度上小学 1 年生が出現するのは第二次小学校令期であるが、それ以前の学制期・教育令期はもとより、近世期における教育機関の新規参入者に対する扱いをも比較参照し、現代に至るまでを見通すことを目指した。小学 1 年生という歴史的存在に着目することで、近代学校がいかにして「子ども」を「児童」にしてきたのか、他方で、我が子の「個性」を大事にしたいものの学校の集団生活に馴染めるようにしつけておかなければという、親たちの葛藤が生じてきた経緯についても考察した。

(3) 「個性調査」に関連する教育事象についての研究

「個性」が概念として注目されるだけでなく調査の対象となるには、その前提として均質性・凝集性のある、統制された集団や社会が形成されていることが必要だと考えられる。小学校がそうした集団として形成されてきた要因としては、等級制から学級制となり、ほぼ同年齢の男女別学級が編制されたこと、画一的なふるまいや思考が求められ、感情の共同体が目指されるようになったことが挙げられる。そこで、「戦前期の学校儀式」「明治期の校則」「学校における罰」「児童虐待問題」「授業空間としての教室」「進級試験と年齢規範」「操行査定」「劣等児」など、個性が捉えられる場や機会、関連する教育事象について多面的に言説研究を行い、論文化した。

なお、本研究では「学校的社会化の理論的・経験的研究『児童になる』論理と実践の教育社会学的探究」(基盤研究(B)18H00990 代表者：北澤毅)と合同で、研究成果報告書『学校的社会化の歴史と現在』1・2を刊行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 -
2. 論文標題 近代日本の家庭と「学校的社会化」 小学校入学をめぐる家庭と学校の攻防	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『学校的社会化の歴史と現在2 「児童」と「学校」の再帰性』	6. 最初と最後の頁 3-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋靖幸	4. 巻 -
2. 論文標題 大正期における児童保護委員制度の成立 救済事業調査会と東京府児童保護委員の活動を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『学校的社会化の歴史と現在2 「児童」と「学校」の再帰性』	6. 最初と最後の頁 75-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水谷智彦	4. 巻 -
2. 論文標題 日本近代における生徒の懲戒方法論の形成過程 明治期の英米学校管理論の受容に焦点化して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『学校的社会化の歴史と現在2 「児童」と「学校」の再帰性』	6. 最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井出大輝	4. 巻 -
2. 論文標題 明治中期から大正期までの小学校学級編制の実態 『藤沢市教育史』の小学校沿革誌から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『学校的社会化の歴史と現在2 「児童」と「学校」の再帰性』	6. 最初と最後の頁 37-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 1037
2. 論文標題 家庭と学校の関係小史 「学校的社会化」の視点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田文学	6. 最初と最後の頁 252-264
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水谷智彦	4. 巻 88-2
2. 論文標題 停学と退学の罰からみる日本近代学校秩序の創出と維持 明治期「学校管理法書」に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 211-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11555/kyoiku.88.2_211	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 927
2. 論文標題 卒業式歌・卒業ソングの同時代史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地理歴史教育	6. 最初と最後の頁 120-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 権藤敦子・嶋田由美・有本真紀	4. 巻 2
2. 論文標題 《勅語奉答》と唱歌教育 雑誌記事を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要『教育学研究』	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/51600	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀・嶋田由美・権藤敦子	4. 巻 64
2. 論文標題 儀式唱歌《勅語奉答》の位置付け 式次第と《勅語奉答》への言及に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 161-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井出大輝	4. 巻 17
2. 論文標題 学級を編制する基準としての年齢観の成立 明治前中期小学校の進級試験論から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究集録	6. 最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水谷智彦	4. 巻 63
2. 論文標題 生徒集団を管理する罰の諸類型 「学校管理法書」中の罰の方法とその効果の分析から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 139-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井出大輝	4. 巻 17
2. 論文標題 閉鎖的な授業空間としての教室の形成過程の分析に向けて 学校建築史研究の再構成を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究集録	6. 最初と最後の頁 51-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 882
2. 論文標題 音楽文化から見る日本近代	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『明治150年を問いたず』2018地理歴史教育 7月増刊号	6. 最初と最後の頁 120-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 62
2. 論文標題 小学校1年生の歴史社会学 明治期・大正期における「初学年」の取扱いに着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 35-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 48
2. 論文標題 卒業式と「感情の共同体」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『子どもが主役になる社会科』千葉県歴史教育者協議会誌	6. 最初と最後の頁 2-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水谷智彦	4. 巻 15
2. 論文標題 児童の資質・能力に対する評価と進路希望の関連性 大正期・昭和初期山形県内小学校の「個性観察簿」の分析から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『立教大学大学院教育学研究集録』	6. 最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水谷智彦	4. 巻 15
2. 論文標題 学校安全の現代的課題と教育実践に関する一考察 学校における防災教育の展開に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『尚網子育て研究センター 児やらい』	6. 最初と最後の頁 36-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 67
2. 論文標題 近代日本における「学校的社会化」の浸透 小学校入学をめぐる家庭と学校の攻防に着目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 9-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井出大輝	4. 巻 113
2. 論文標題 教授活動を妨げる逸脱者としての「劣等児」の成立—明治後期小学校の成績不振児をめぐる議論の検討を通して—	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 24-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件(うち招待講演 3件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 水谷智彦
2. 発表標題 日本近代における生徒の懲戒方法論の形成過程 明治期の米国学校管理論の受容に焦点化して
3. 学会等名 日本教育社会学会第73回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 水谷智彦
2. 発表標題 日本近代の教育と罰をめぐる歴史社会学研究の目的と意義
3. 学会等名 日本教育学会第80回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 有本真紀
2. 発表標題 調査対象としての尋常小学1年生 明治期・大正期の教育書・教育雑誌から
3. 学会等名 日本教育学会第79回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 有本真紀・嶋田由美・権藤敦子
2. 発表標題 儀式唱歌にみる《勅語奉答》の位置付け 儀式唱歌が作った子どもの心と身体（ ）
3. 学会等名 日本音楽教育学会第51回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 水谷智彦
2. 発表標題 生徒の懲戒方法の効果と意義に関する言説の歴史研究 明治期「学校管理法書」中の罰に着目して
3. 学会等名 日本教育学会第79回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 水谷智彦
2. 発表標題 校則がもつ意味とその社会的役割の考察 明治期の学校管理論に着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井出大輝
2. 発表標題 人物評価論の変化に伴う児童観の変容 明治期操行査定論の分析を通して
3. 学会等名 日本教育社会学会第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 嶋田由美・有本真紀・権藤敦子
2. 発表標題 戦前の子どもが語る《勅語奉答》《海ゆかば》の記憶 儀式唱歌が作った子どもの心と身体()
3. 学会等名 日本音楽教育学会第50回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuyuki Takahashi
2. 発表標題 Challenging Child Issues in Japan
3. 学会等名 The 2nd International Seminar on Family and Consumer Issues in Asia Pacific (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuyuki Takahashi
2. 発表標題 Current Status and Issues of Early Childhood Education and Care Systems in Japan
3. 学会等名 International Symposium: Current Problems and Strategies for Supporting the Healthy Development of All Children (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 水谷智彦
2. 発表標題 訓練の記述からみる教師の児童観 大正期愛媛県内小学校「人別表」に着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会 第70回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 嶋田由美・有本真紀・権藤敦子
2. 発表標題 儀式規程・儀式唱歌の制定と「正しく歌う」歌唱指導 儀式唱歌が作った子どもの心と身体(1)
3. 学会等名 日本音楽教育学会第49回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 有本真紀
2. 発表標題 教育勅語と唱歌 儀式による共存関係を中心に
3. 学会等名 日本教育学会公開シンポジウム「教育勅語問題を考える」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 水谷智彦
2. 発表標題 「個性調査」からみる評価とその社会的規定性 大正期山形県内小学校の『個性観察簿』の分析をとおして
3. 学会等名 日本教育社会学会第69回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋靖幸
2. 発表標題 大正期における児童保護委員制度の成立 救済事業調査会と東京府児童保護委員の活動を中心に
3. 学会等名 日本子ども社会学会第29回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高橋靖幸
2. 発表標題 大正期における「児童保護」の理念と展開 東京府「児童保護員」制度とその活動に着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会第75回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 元森 絵里子、高橋 靖幸、土屋 敦、貞包 英之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 232
3. 書名 多様な子どもの近代 稼ぐ・貰われる・消費する年少者たち（「貰い子たちのゆくえ 昭和戦前期の児童虐待問題にみる子どもの保護の接合と分散」(高橋靖幸)）	

1. 著者名 神代健彦、越川葉子、小谷英生、藤谷秀、和田悠、小野祥子、有本真紀	4. 発行年 2019年
2. 出版社 はるか書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 悩めるあなたの道徳教育読本（「音楽教育の成り立ちと道徳」（有本真紀））	

1. 著者名 日本音楽教育学会編（執筆者：有本真紀、今川恭子、小川容子、加藤富美子、権藤敦子、齊藤忠彦、菅裕、本多佐保美、ほか）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 248
3. 書名 音楽教育研究ハンドブック（「社会集団と音楽教育」（有本真紀））	

1. 著者名 小川崇・小川澄江・請川滋大・杉浦英樹・山口宗兼・村上智子・金山美和子・木村吉彦・高橋靖幸・石井美和	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学術図書出版社	5. 総ページ数 254
3. 書名 未来を拓く保育の創造（「保育の制度」（高橋靖幸））	

1. 著者名 元森絵里子・吉岡一志・南出和余・高橋靖幸・大嶋尚史・坪井瞳・藤間公太・針塚瑞樹・土屋敦・野辺陽子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 208
3. 書名 子どもへの視角 新しい子ども社会研究（「子ども研究における「構築」とは何か 児童虐待問題の歴史」（高橋靖幸））	

1. 著者名 有本真紀 日本教育学会教育勅語問題ワーキンググループ編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 世織書房	5. 総ページ数 283
3. 書名 「学校儀式と身体 教育勅語と唱歌の共存関係を中心に」『教育勅語と学校教育 教育勅語の教材使用問題をどう考えるか』	

1. 著者名 有本真紀 教育社会学事典編集委員会編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 896
3. 書名 「学校教育が生み出す共同性」『教育社会学事典』	

1. 著者名 高橋靖幸	4. 発行年 2024年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 448
3. 書名 児童虐待の歴史社会学 戦前期「児童虐待防止法」成立過程にみる子ども観の変遷	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高橋 靖幸 (Takahashi Yasuyuki) (30713797)	新潟県立大学・人間生活科学部・准教授 (23102)	
研究協力者	水谷 智彦 (Mizutani Tomohiko) (00791427)	尚絅大学・生活科学部・講師 (37404)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	井出 大輝 (Ide Daiki)	東京保育専門学校・講師	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 「個性科研」研究会：日本における「個性」の成立と展開	開催年 2018年～2018年
--------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------